

公益財団法人



すみりんニュース No.16

■編集・発行 公益財団法人住吉隣保事業推進協会
 ■編集発行人 理事長 友永健三

公益財団法人住吉隣保事業推進協会 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東5-3-21

TEL 06-6674-3732 FAX 06-6674-7201

<http://www.suminrin-shi.or.jp/>

この号の内容

- 1 住吉地区連続講座『水平社博物館の見学と柏原地区のフィールドワーク報告』
(1)~(9)
- 2 公益財団法人住吉隣保事業推進協会の動き(9)~(10)

全国水平社90年の歴史に学ぶ

住吉地区連続講座7月例会

「水平社博物館の見学と柏原地区のフィールドワーク報告」

案内：寺前美加さん（NPO法人「ほっとねっと」）

去る7月22日（日）、午後1時から3時半まで、「全国水平社90年の歴史に学ぶ」住吉地区連続講座の一環として、奈良県御所市にある水平社博物館の見学と柏原地区のフィールドワークが行われました。案内を頂いたのは、NPO法人「ほっとねっと」の寺前美加さんで、参加者は22名でした。

以下は、水平社博物館の見学とフィールドワークでの説明を、事務局の責任でまとめたものです。

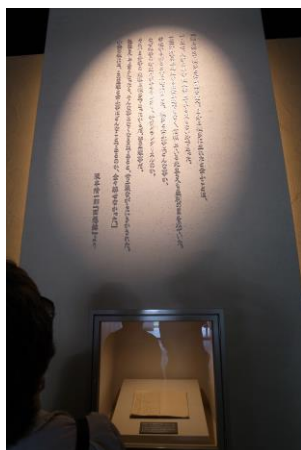
●水平社博物館館内

（ビデオ鑑賞 水平社創立までの柏原）

水平社創立までの柏原地区の紹介がありました。（ナレーション・阪本清一郎の回想記）

いま朗読しているのは、ここに展示している阪本清一郎さんの回想記です。阪本清一郎さんは水平社創立のメンバーで、^{にかわ} 膠工場の経営者です。晩年に回想記を書かれていて、展示している頁は、差別との出会い、小学校での差別体験の回想です。水平社創立の原点ともいえる部分です。

水平社は、比較的裕福で教育も受けられた人たちが、いろんな知識を身につけて、立ち上げた運動です。多くの記録が残されて



いますが、これはそのなかの一つとして、展示しています。

水平社の歴史は20年ぐらいですが、この博物館では、水平社創立前史から、創立後の活動の様子から消滅までを展示しています。いまは、全国水平社創立90周年記念として「水平社運動・部落解放運動90年の歴史」の特別展を、8月31日までの期間でおこなっています。

○水平社創立前史

このコーナーは、水平社が立ち上がるまでの、この村の50年ぐらいの様子です。

この人は坂本清俊さんです。阪本清一郎とは従兄弟同士にあたる方ですが、年齢は清俊さんのほうが30歳ぐらい上なので、水平社のメンバーからすれば親の世代になります。阪本本家の当主で、阪本清一郎さんは分家です。この人が、幼少のときに明治維新がありました。

江戸時代には、いまこの博物館が建っているところは柏原村の本村で、橋を渡って川の向こう側が枝郷岩崎、つまり政治的に本村に支配されている枝村、という関係でした。明治維新になって四民平等ということになり、枝郷岩崎が岩崎村として一村独立しますが、自村名義の土地を持たない、名前だけの独立でした。それで村の運営に行き詰まって、もう一度、旧本村側に再合併するか、土地を再分割してほしいというのですが、なかなかうまくいきませんでした。

結局、明治の町村大合併で、10 ぐらいの大字で、1889 年（明治 22）に掖上村わきがみという大きな村ができ、川の向こう側も旧本村も結果的には掖上村の一部になります。坂本清俊さんは、その掖上村の初代収入役になっています。川の向こう側は長年、枝郷として差別されていまして、村の三役にその村出身の人がなるといのはイメージしにくいかもしれませんが、川の向こう側が経済力を持っていたということです。差別されながらも、当時 25 歳だったこの人を収入役として送り出すことができる力があったということです。この人は若いときから、川の向こう側に対する差別との闘いの先頭に立つリーダーだった人です。

こういうことを踏まえて、展示物を見ていただきます。「岩崎村から掖上村へ」と書いてありますが、いま申し上げたプロセスです。全国的にみても、大きな村に合併・再編されるという動きが一通り終わって、明治政府は新小学校令を出します。一村に一校、小学校をつくるということで、それを受けて、奈良県の郡役場も一村に一校つくる、ただし、被差別地区の子どもは別の学校にするという通達が出ました。同じ掖上村民なのに、川の向こう側の子どもたちは別の学校になったということです。学校の間取り図が 2 枚あります。下の方は、レトロな懐かしい校舎、教室がいくつあって、運動場があります。一方、川の向こう側の子どもたちだけが通った学校は、人数も多いですが一つしか教室がないし、こんなに狭い場所で勉強していました。通学も山の向こうに渡



って行くといった、低学年の子どもには危ない場所にあったということで、川の向こう側の人たちは抗議します。いっしょの学校に通わせろという学校統合闘争を、11 カ月間、同盟休校して闘います。

こちら側の保護者は、最初、いっしょになるのは困るということで、統合反対の同盟休校を逆に数カ月間、やりかえすという、熾烈な闘いだったそうです。だんだん時間が経つにつれて、こちら側の保護者も気づいたことがありました。当時、公立学校といってもまだできたばかりですから、寄付金でまかなっていた部分があった。二つの学校にまたが



っていたら、それだけ経済的にしんどい、ということに気づいて、それならいっしょになったほうが得だ、ということなど、いろいろな要因が重なって、ついに統合を勝ち取るわけです。

新たに学校を建て直して、そこに川の向こう側の子どもも通えるようになります。統合後に、水平社のメンバーも小学校に入学し、同じ学校に通っています。だから、阪本清一郎さんの回想記のように、こういう差別を先生や子どもから受けたということが書かれているわけです。同じ学校に通うことによって差別を受けることになります。しかし、同じ学校に通って差別を受ける以前に、分離教育という差別の歴史があった、それを乗り越えてきたということを示したものです。

○闘いを支えたもの

次は、「闘いを支えたもの」という大きなスペースの展示です。先に言いましたように、村の収入役に坂本清俊という若い青年を送り出したという経済基盤がありました。水平社の運動にもお金がかかります。ここでは、運動を支えていた基盤はどうだったのかという産業の様子を展示しています。

川の向こう側は手作業などは多様なものがありましたが、二大産業として、膠づくりと、桐下駄など桐の加工業がありました。膠づくりは阪本家を中心に江戸時代からの伝統産業で、相当な財を成していました。桐の加工業は明治以降に技術を持ち帰った人が広めたもので、当時の新興産業でした。

この二大産業で、川の向こう側と旧本村側では、面積比では20:1ですが、川の向こう側は、その20分の1の土地で、年間の総収入は旧本村を上回っていたということです。雇われている人と経営者では貧富の差は激しかったですが、単純計算で言えば、一人当たり年間3000万円稼いだという村で、それが水平社を立ち上げる原動力にもなったし、運動を成り立たせていたわけです。

奈良県の戦後の部落解放運動でも、運動が熱心な地域とそれほどでもない地域があります。運動を熱心にやっているところは、地場産業が何かある場所、経済的に潤っている場所で、あまり熱心でない地域は、地場産業がなく、出稼ぎに行っている地域です。その地域に産業があるかないか、ということの重要性、膠と桐材加工の展示は、その実践モデルの展示という意味があります。

いまは膠工場は一軒もないので、あとで昔あった場所にご案内しますが、阪本清一郎さんの膠工場がありました。膠というのは夏の間は仕事はなくて、冬に牛や馬の油を煮詰めて、稲を刈り取ったあとの田んぼに干場をつくって、そこに膠を干して固め、固形状にして出荷するというのが仕事です。

桐下駄の展示は、一足の下駄になるまでの工程ですが、工程ごとに専門の職人がいるという細分化された仕事でした。手に取って自由にご覧いただけるようになっています。

坂本清俊さんは水平社のメンバーからみれば親の世代の方で、部落改善運動の担い手です。部落改善運動は明治から官主導で始まっています。川の向こう側の村のように枝郷として差別された村は、免税でした。明治政府は税金を取るために部落改善運動を官主導で早い時期から始めました。それを民間の力でもやっつけようということで、民間の部落改善運動団体として大和同志会ができましたが、坂本清俊さんはその中心メンバーです。大和同志会という名前ですが、奈良県内だけではなく、北は群馬から南は九州まで会員がいました。『明治之光』という雑誌を約1万部発行して、全国に発送するというネットワークを持っていました。

大和同志会は保守層ですから、水平社のメンバーに対しては、「いまの若いやつは何をするかわからん」ということで、潰しにかかったりするんですが、しっかりした運動の基盤を親の時代にすでに持っていたということです。そういう基盤があって、水平社のメンバーも、融和運動の限界をこえて、次の運動を立ち上げることができたということです。展示ではそういう大和同志会の活動を評価しています。

坂本清俊さんと阪本清一郎さんですが、親戚同士ですが、「坂本」と「阪本」と字が違います。これは本家と分家に分かれるときに、本家が地主で、分家が膠業をやるということで分かれたのですが、本家でも膠業をやることになり、商売がたきになります。それでややこしいので、「阪」と「坂」を使い分けています。親戚同士ですが、産業のライバルであり、運動のライバルでもあったという事情で字を使い分けているわけです。

○柏原青年共和国から燕会へ

次は、日清・日露戦争後の時代です。日清・日露戦争前後、男手が少なくなったところへ農作業を手伝いに行く、ということで、全国で青年団ができていきます。ここにも青年団ができますが、「柏原青年共和国」という名前をつけます。「共和国」という名前の付け方から、自意識がある地域だということがわかります。

青年団は、坂本清俊など水平社のメンバーの親の世代のときにできているのですが、水平社のメンバーが大人になって、青年団の担い手になると、青年団の中に「燕会」というサークルをつくり、活動を始めます。いまでも大きな団体の中に趣味のサークルがあったりしますが、それと同じような位置づけで「燕会」活動を始めます。比較的裕福な人たちが多く、親睦旅行をしたりしています。また、こんな差別のある国は嫌だから南の島に移住しようという計画もあったようですが、それは実現しませんでした。各地に親睦旅行に行き、集印帳に神社仏閣のスタンプを押したり



しています。

燕会は、燕が3羽、輪になっているロゴマークもつくっています。集印帳の表紙にも使われています。いまでも使えそうなマークで、西光万吉さんのデザインです。西光万吉さんは上野の美術学校に学んで、日本画家として大成していてもいい人でした。このような絵馬なども奉納されていま

す。絵が上手で、デザイナーでもありました。広告デザイナーになってもおかしくないぐらいで

す。燕会の法被の襟の部分にも燕会のマークが入っています。この時代にすでにお揃いの法被も作っているわけです。

燕会はまた、日常、みんなが使う品物を安く仕入れて安く売るといった活動や、低利融資もやっていました。いまの生協や共済の仕組みを燕会の中でつくっていきます。地産地消ということがいまも言われていますが、彼らはPRも上手で、自分たちの活動をPRするためのマッチも作っていて、マッチには「生産者から消費者へ」というスローガンが書かれていました。いまはよくある言葉ですが、この時代にすでに使っていました。そんな時代に先駆けたことをしていました。あとでご案内しますが、燕会は燕神社という神社も手づくりしたりしています。

○水平社の創立

この人が西光万吉さんで、芸術家肌の人です。阪本清一郎さんは、いかにも実業家という感じで、タイプの違うコンビでした。このコンビで運動を立ち上げていきました。

あるとき、雑誌の回し読みをしているうちに、『解放』という雑誌に載った、「特殊部落民解放論」という論文が目にとまりました。佐野学という社会主義の学者の論文ですが、この論文が彼らの心に火をつけました。いままでの同情や憐れみ、やってもらう運動ではなく、部落民自身が立ち上がったときに、部落解放運動はほんものの運動になるということが書かれていました。彼らはもともとそう思っていました。学者の論文にもそういうことが書いてあるということが刺激になって、自分たち独自の運動を立ち上げていこうと、議論をし、水平社創立に向かうわけです。

まず彼らは『よき日のために』という水平社創立趣意書を発行します。この『よき日のために』の奥付は、「編集兼発行人」の名前が2回も貼り



替えられています。最初は「駒井喜作」という個人名になっていますが、その上に「燕会同人」とした「編集兼発行人」名を貼っていて、さらに次に「水平社創立事務所」と貼っています。だんだん組織として固めていったということがわかります。佐野学の論文が7月に載っていて、8月ぐらいから会議を始めて、翌年3月3日に水平社を創立するわけですが、この半年ぐらいの間に、組織として固めていった様子が、この奥付からもわかります。

そういうスピーディーな盛り上がりでしたが、必ずしもスムーズではなかったようです。先に言いましたように、大和同志会とは対立しているの^{にんきょう}で、任侠の親分に間に入ってもらって握手会をしたりします。また、この『よき日のために』も印刷できないようになりかけますが、間に入れてくれる人がいて、印刷できるようになった、という苦労もありました。

彼らがいちばん危機感をもったのは、大阪の中之島で大日本平等会という大きな融和団体が同胞差別撤廃大会を開くことを聞いたときです。自分たちの小さな運動はつぶされてしまうと思って、大日本平等会の発起人の難波英雄さんという大阪時事新報の記者のところへ出向いて、大日本平等会に協力せずにわれわれに協力してほしい、と訴えます。難波さんも立場上、最初は困ったと思いますが、結局、彼らに協力します。

水平社創立の10日ほど前の2月21日、大阪の中之島公会堂で開催された大日本平等会の大会のとき、難波さんは彼らを壇上に上げました。彼らは、「来月、われわれは京都で水平社を創立しますので、ぜひ来て下さい」と訴えます。大日本平等会に集まった聴衆の前で水平社の宣伝ができたわけです。中之島公会堂の2階から「京都へ、京都へ」というピラを撒いています。こういう宣伝活動もあって、歴史に残る水平社創立大会を成功させることができました。

ここは、水平社創立大会を再現した部屋で、腰掛けてご覧いただけるようになっています。ガラスケースにも展示物を展示していますので、ご覧ください。

○水平社運動の展開

次のコーナーは水平社創立後の様子です。水平社は、大正デモクラシー時代に創立されています。そのころは農民運動や労働運動も盛んだだったので、そういった運動と連携して、運動を展開しました。ここではそういう関係の資料を展示しています。

しかし、一方では、組織となるとどこでもいっしょで、水平社も初期から対立がありました。大

きく言えば、アナ派、ボル派という思想的な意見の違いから、二つに分かれて対立していました。第4回大会、7回大会、10回大会のときには、分裂して、水平社がなくなる、というぐらいの深刻な状態でしたが、阪本清一郎さんや大阪の泉野利喜蔵さんらが間に入って、一つにまとめていたということです。そういう状況が伝わるような資料も展示しています。他の運動との連携と水平社内部の苦悩、その両方の展示をしているコーナーです。

次は高松差別裁判糾弾闘争のコーナーです。部落出身を隠して結婚したことが罪になるという高松地方裁判所の判決が出て、差別裁判だ、裁判をやり直せと、この裁判の不当性を訴えて請願行進など全国的な運動を展開した糾弾闘争です。水平社の運動は、もともと糾弾闘争がメインですから、さまざまな差別糾弾の闘いがありましたが、この闘いを特に展示しているのは、この闘争が効果的で巧みなキャンペーン活動を展開し、多くの資料が残っているということがあります。この裁判はおかしい、不当判決だ、「差別判決を取り消せ、然らずんば解放令を取り消せ」と、全国津々浦々に訴えていったわけです。このときに水平社は大幅に会員数を増やしています。いまでも目を引くポスターや新聞など、表現力があり、キャンペーン効果を出すことができた、ということがわかる展示になっています。

次は衡平社との交流についての展示です。朝鮮半島では水平社創立から1年後に衡平社を創立しています。衡平社は朝鮮半島の被差別民である白丁ベクチョンの解放運動です。当時は、交通手段、通信手段が発達していないにもかかわらず、水平社と衡平社はお互いの大会への来賓の行き来や、祝電のやりとりなどしています。当時の朝鮮半島は日本の植民地ですから、日本の政策のなかで、二重三重に苦しめられていました。水平社のメンバーとしても、日本の政策はおかしいということに言及していないわけではないのですが、運動全体としては、そういう問題提起とならなかったということもあって、残念ながら交流は途中で途絶えてしまいます。でも、一定、海を越えた交流があったわけです。

水平社はどちらかというと当事者中心の運動だったのに対して、衡平社は一般の人やキリスト教団もかかわったというところに特徴があります。また、水平社と同じように、組織内の対立が早い時期から起こって、拠点が変わったりしました。

○水平社の消滅

ここは水平社の終わりの頃のコーナーです。水平社は社会主義の学者の論文に刺激を受けて立ち上げた組織であり、当時盛んだった社会主義などの思想に影響された運動ですから、初期の頃は、軍国主義反対、ファシズム反対のスローガンでした。しかし、1937年の日中戦争を境に方針転換をし、天皇制の下での平等をめざそう、ということになります。日本の戦争に積極的に協力しよう、挙国一致で団結しようという、国策に沿った方針に変えていくわけです。

10回大会の頃までの対立は、共産主義と無政府主義などの対立だったのですが、水平社最後の頃の対立は、それまで共産黨員だった人が、国に協力するのなら水平社をなくしてこうという水平社解消派と、水平社を残そうという存続派の両派の対立が深刻でした。松本治一郎さんらは水平社を存続させようとします。しかし、戦時体制のなかで結社が届出制から許可制になります。水平社は団体としての届出を出さず、1942年1月、法律の規定により自然消滅します。

西光万吉さんも、共産主義者弾圧のなかで刑務所に入っていたのですが、出所後は天皇中心のよりよい世の中をめざそうという運動に変わっています。

そのように個人や団体が180度、コロッと転向できるのかというと、もともとそうではありません。後ほどご覧いただく燕神社は、「解放令」50周年記念に建てているわけですが、つまり、天皇が「解放令」を出してくださった、という思いがあります。親の世代から受け継いだ、心に持っているものがベースにあるなかで、当時台頭してきた社会主義やいろんな思想の影響で立ち上げていった水平社の運動なので、日々、個人も団体としても葛藤していたのではないかと思います。

●柏原地区のフィールドワーク

それでは、水平社博物館から出て、西光寺のほうへ行きます。

○西光寺

ここが西光万吉さんの生家の西光寺です。西光さんは、本名は清原一隆ですが、生家のお寺の名



前をとって、西光万吉としました。この鐘は、差別事件などで村人が集まるときに、早鐘として打たれたものです。

そちらが西光万吉さんのお墓です。「水平社創立者 西光万吉」とあり、昭和45年に74歳で亡くなったと書いています。後ろに回ると、昭和51年に「西光万吉を偲ぶ会」の有志の方がこれを建てたと書いています。亡くなってから何年か経ってから建てたわけです。

西光万吉さんは長男なので、この寺の住職になるはずでしたが、弟さんが住職になって、その子孫がいま住職です。西光さんは、晩年は和歌山県のお連れ合いのご実家で暮らし、そこで亡くなりました。お墓も和歌山にあるそうですが、ここのお墓は、有志が後から建てたわけで、それで亡くなってから時間があいているわけです。「西光万吉」というお墓の文字は、奈良に西口敏夫さんという同和教育の第一人者の先生がおられますが、その方の書です。

また、「人の世に熱あれ、人間に光あれ」の文字は、西光万吉さんご自身の文字を写したものです。

西光寺は、江戸中期に、枝郷の38軒の家が寄進して、何年かかけて建てたお寺です。38軒であれだけ立派なお寺を建てるためには、暮らしにある程度ゆとりがなければなりません。どういって暮らしを成り立たせたかということ、おそらく草場権です。江戸時代、40カ村や多い時には100カ村ぐらいを草場（縄張り）として、そのエリアで牛馬が死んだら無償で引き取ります。その権利を草場権といいます。無償で得たもので加工するので儲かるわけですし、その草場の範囲で芝居や相撲興行があれば、その興行収入の一部が枝郷に入る仕組みがありました。

江戸時代、幕府としては差別を温存させておきたいので、一方で保護して、差別政策を続けました。そのためそういう特権もあったのですが、「解放令」によってその特権もなくなりました。税金を払わなければならないことになり、明治以降、被差別部落は貧乏になりましたが、江戸時代の被差別部落の暮らしは、明治以後とは違ったものがあつたということです。

草場権は、死んだ牛馬を引き取ることで儲けるということもありますが、一方、穢れたものを引き取るということで、キヨメといった、宗教的な意味合いも持っていた可能性が高いと思います。

床屋などは、村の人が集まる憩いの家みたいなものですが、そういうところに西光さんが来て、話をするのを、みんなが楽しみにしていたそうです。西光さんは、科学雑誌をよく読んでおら

れたので、自動ドアの時代が来るとかいった話を大正時代からされていたということです。

そういう西光さんが、1970年の万博の年に亡くなっていますが、最後の講演では、人工衛星が飛ばされる時代になったけれども、二度も悲惨な戦争をした人類だから、アメリカには人間尊重衛星という使い方をしてほしいと、言い残しています。

社会主義とかいろんな思想を学んで運動をつかっていった人たちですが、隠れた面として、科学の知識を持っていたというのが、大きな力になっていたのではないかと思います。科学性があつたということです。

○「解放令」から5万日日記念碑

これは「解放令」から5万日日記念碑です。4年前に建てられたものです。この村に「五万日の日のべ」という言い伝えがあるのに基づいた碑です。「解放令」が出た直後に、枝郷の庄屋さんが、本村の大庄屋さんに呼ばれて、「解放令がお上から出たけれども、あれは5万日延期になつた」と嘘を言われた、という言い伝えがあります。ほんとうにそういうやりとりがあつたかどうかはわからないのです



が、では延期になつた5万日日がいつになるかというと、2008年9月3日だそうです。その「5万日日」を記念し、部落解放運動の前進を誓い合うために建てられた碑です。

○駒井喜作宅跡・共同浴場跡

あの山が葛城山です。ツツジで有名な山で、山の向こうは大阪です。ここは山を隔ててすぐ大阪なので、膠の売買などの産業や結婚などで行き来があり、大阪と密接に結びついた村でした。明治初期は大阪府に属していて、行政的にも大阪でした。

奈良は盆地なので、夏は蒸し暑く、冬は底冷えがしますが、特にこのあたりは山の吹き下ろしで寒い場所です。その寒さが膠を冷やして固めるといふ作業にはよかったです。ここは、川が2本合流していますし、すぐ向こう側にも2本合流していて、4つの川の合流地点でもあります。だからこのあたりはすぐ水浸しになる、水害に悩まされていた場所です。また、山が迫っているの、山崩れの心配もある場所です。一方では、合流地点

としての水量の豊かさを利用した皮鞣しなどの産業も盛んでした。

村には8軒のお金持ちの家があって、順番に庄屋をやっていました。その中の一軒で、^{けたはず}桁外れの大金持ちだったという家が米田家だったということです。米田家の何代目かは大阪の太鼓屋又兵衛に養子に行っています。そういう大阪との結びつきの強さを示す資料もあるそうです。

西光寺のほうに少し草が残っているところがありますが、戦争当時、そのへんに共同浴場があったということです。共同浴場の場所は4回の変遷があります。いまみなさんが立っているあたりには床屋さんがありました。

駒井喜作さん宅に「水平社創立事務所」の看板を掲げて、水平社創立準備にとりかかりました。当時は、大正デモクラシーの時代と言っても、運動を起こすとなると警察が取り締まるので、看板を掛けておいて、別の場所で会議をしたということです。いま登っていただいた階段ですが、昔は階段がついていなかったそうです。塀からこっちに2メートルぐらい、共同浴場へと続く道があって、その向かい側に家があった、という目印です。

ここに持ってきました写真は、昭和の終わり頃、20~30年前の比較的新しい写真です。いまのように整備される前は、これぐらい家が建て込んでいたということです。土地が狭いのに人数が多いと。また、ここに来たら食べていけるといって、「嫁にやるなら岩崎へ」と言われたそうですが、どんどん流入して、人口が増えたという側面もあります。

では燕神社の方へ登っていきます。

○燕神社

この神社の広場で夜会を開いたり演説の練習をしたりしていたので、「建議の庭」と呼んでいました。「解放令」50周年の記念に神社を手作りしました。神社をつくっているときの写真もあります。若い力でつくったわけです。当時つくった祠堂は残っていないのですが、もともとは燕会のメンバーがつくった神社です。いまは新しく祠堂がつくられています。

大正時代に作った新しい神社ですから、祭神は何かということですが、阪本清一郎さんのお連れ合いの実家も大阪の膠工場の娘さんで、その地域の氏神さんをお祀りしているといいます。大阪出身の神様です。

そのように大阪との結びつきが強いのです。



この地域のご先祖が最初に住んだのは、このあたりではないかと言われていています。先祖の職業は陰陽師おんみょうじだったのではないかと言われていています。陰陽師が占いにつかう星を刻んだ石が大量に出土しています。神社との位置関係からも先祖の職業は陰陽師だったと推測されています。

○阪本清一郎生家跡

南から北に川が流れていますが、大和川に合流して大阪湾に注ぎます。ここは御所市の北東端で、橋を渡ると高取町になります。「お里・沢市」の「壺坂靈験記」で有名な壺阪寺があります。ここは薬の行商で栄えた町ですので、いまの大手の製薬会社のルーツにもなっています。

前に見える白い建物が佐藤薬品工業です。あそこは榎原市になります。正面に見えている可愛い山が大和三山の一つの畝傍山です。畝傍山の下に榎原神宮があり、神武天皇陵もあります。ただ、神武天皇陵がどこかと比定するなら、このあたりも候補地になっておかしくない場所でした。この見晴らしのいい場所から神武天皇が国見をしたという国見伝説があります。古代は渡来系の技術集団が住んだ要所であった可能性が高い場所です。

いま見えているのが改良住宅です。大阪なら団地ですが、建売り住宅のような改良住宅です。でも一戸建てではなく、隣とは倉庫でつながっているので「二戸一」の集合住宅です。御所市は財政再建団体で財政的にしんどかったので、2002年の法律が切れるまではあまり施策ができなかったのですが、駆け込みでつくられたもので、比較的新しいわけです。

もともと60軒あったのですが、ここに50軒建てて、残りの10軒は川のこちら側、本村側に建てています。阪本清一郎さんの膠工場があった場所です。阪本さんはお金があったので、本村側に土地を買って膠工場を建てたわけです。阪本さんの土地だから同和地区指定をして、施策をおこなっているわけです。

○阪本本家宅跡

ここに「旧岩崎村庄屋敷跡」とありますが、阪本家の本家である坂本清俊さんの家があったところです。250坪ぐらいありました。そちらのほうは、阪本清一郎さんが生まれ育った阪本家の分家があったところです。阪本清一郎さんが分家・独立後は、家屋敷も工場も本村側につくりました。その阪本清一郎さんの敷地の中に、「水平社宣言記念碑」があります。

ここが阪本清一郎さんが独立したあとの自宅と膠工場があったところで、その後ろが干場です。

た。中国風のお洒落な家で、文人墨客も来たということですが。

膠はボンドにもなるし、絵の具の顔料にもなりますが、ここの膠は奈良市内の墨屋に卸してあります。習字に使う墨です。いまでも墨は奈良市で90%以上生産しています。そういう奈良県民にとっての伝統産業を支えていたのが、ここの膠でした。でも、もっと儲かるものがあるはずだと、商品開発をしようと、信州に自前の研究工場を建てて、阪本清一郎さんは自分で研究して、写真のフィルムを開発しました。当時、軍需産業として戦地でフィルムを回すのに使えるということで、富士フィルムの前身の工場に売ったということです。いまのようなデジカメの時代になるまでは、写真フィルムが出回っていましたが、それは阪本清一郎さんのそういう野望があったからです。科学者の面が阪本さんにもあったわけです。科学性で運動を支えていたという面があります。富士フィルムはデジカメの時代になっても元気な会社で、いまはカラーゲン化粧品を売ったりしています。そういう意外なところに阪本清一郎さんの足跡が残っています。

○「水平社宣言記念碑」

ここが阪本さんの敷地の中で、水平社創立50周年の記念に、「^{けいこう}荊冠友の会」という水平社のOBの会の人たちが「水平社宣言記念碑」を建てました。この場所を選んだのは、燕神社が真正面に見えるからということです。

この記念碑の維持管理がたいへんでしたが、奈良県農協の会長さんが西光万吉さんの親友だったので、手弁当で庭師を派遣して整備していたと聞いています。いまは、御所市と住民の方できれいにしています。



碑には荊冠旗と水平社宣言が刻まれています。荊冠旗も西光さんがデザインしたもので、キ

リストの影響で荊の冠がデザインされています。お寺の息子さんですがキリスト教の影響も受けているのです。宣言には「殉教者」という言葉もありますし、最後には「願求礼讃」という仏教用語もあります。また、ゴーリキーの作品から「人間は尊敬すべきものである」という言葉をとっています。人権宣言のずっと前につくられた水平社宣言には、いろいろな思想が入っています。

○神武天皇社

ここは神武天皇を祀る神社です。燕神社がある場所は鬼門に当たります。この地域のご先祖は、燕神社のあたりに最初に住んだと言われていますが、キヨメやハライの役割だろうと言われています。御所市は人口の4分の1が被差別部落ですが、地区と神社との関係が、鬼門か裏鬼門の場所が多く、そういう宗教的な意味合いの立地だった可能性が高いと言われています。

神社の位置も、神武天皇社は太陽神、陽の神様ですが、その真西には吉祥草寺（きっしょうそうじ）というお寺があり、これは陰陽両方です。さらに真西に行くと、京都の下鴨・上賀茂社の元締めのような鴨都波神社という陰の神社があります。これらが東西一直線に並んでいます。そういう位置関係があります。キヨメ、ハライという位置づけだったという可能性が高いです。

本居宣長の日記にも「檀原神宮は柏原村にあり」と書いてあります。柏原村はここをさすわけで、もともと檀原神宮の所在地はここだった可能性が高いわけです。しかし、神武天皇陵がここだということなら、名誉なことだとみんな喜ぶかという、必ずしもそうではなくて、ここが檀原神宮であることを示すような資料は焼いてしまったということです。それも「五万日の日のべ」の話と同じで、ほんとうかどうかはわかりませんが、子孫の方はそう聞いているそうです。

畝傍山中腹の洞村という集落は、その下が神武天皇陵になったので、天皇陵を見下ろすことになるので、平地に移転しました。



この狛犬や灯籠は「皇紀2600年」、1940年（昭和15）に、米田長一郎さんが寄進したもので、米田さんの名前が入ってい

ます。そちらの狛犬は明治年間に本村側の庄屋の名前が入っています。時代によって経済的な力関係が違っているということです。

○誓願寺

このお寺は誓願寺です。浄土真宗本願寺派で、西光寺と同じ宗派です。水平社創立の頃の誓願寺の住職は三浦参玄洞といって、水平社に協力的だった人です。西光さんは芸術家肌の人で繊細です。自殺願望があったのですが、三浦参玄洞が法隆寺に蘭陵王の舞を見に連れて行ったりして、西

光の精神的な支えになります。西光さんはそのときに見た舞を絵に描いたりしています。いまで言うメンタルケアのようなもので、精神的に支えました。

また、『よき日のために』という水平社創立趣意書は、大和同志会の会長の松井庄五郎さんが、こんな危険なものは印刷できないと言って、いったん印刷できないようになるのですが、この三浦参玄洞さんが、同朋舎という京都の印刷屋さんを手配して印刷できるようになったということです。水平社創立後は三浦参玄洞さんは『中外日報』という宗教系の新聞に応援記事を書いたりして、水平社に全面的に協力しました。

○山田孝野次郎記念碑・巽医院跡

山田孝野次郎さんは、この村に生まれて阪本清一郎さんにその才能を見込まれました。水平社創立大会で少年代表として学校での差別を告発し、その後、各地の水平社大会などで演説、全国を奔走しました。水平社第2回大会では、全国少年少女水平社の設立を提起しました。水平社の委員長の松本治一郎さんにも期待され、松本さんの地元の福岡に住みましたが、1931年（昭和5）、25歳の若さで亡くなりました。郷里の西光寺で全国水平社葬が営まれました。この碑は、全国水平社によって1936年に建てられたものです。

巽^{たつみかずま}数馬さんは、4代続いた医者の子孫の3代目で、医者を目指して東京で学んでいたころに自由民権運動にかかわり、検挙されて、3年ほど服役しました。出獄後は柏原で医院を開業するとともに、先ほど言いました、学校統合闘争の指導者として活躍しました。その後も、医師として、また、差別糾弾闘争の闘士として活躍し、1944年、78歳で亡くなりました。



公益財団法人住吉隣保事業推進協会（以下、すみりん）は、これまで調査収集した歴史資料の一部をホームページで公開しました。

公開中の歴史資料は、①大川恵美子画集目録、②住吉民具目録、③住田利雄写真集目録、④住吉地区に関わった実態調査目録です。①では、故大川恵美子さんが生前に手がけた住吉部落の昔の暮らしぶりや仕事などを描き出す108点の絵やスケッチを公開しています。②では281件の民具が確認できました。なかでも仕事に関する民具が多くみられました。これら民具は、当時の住吉の人びとが、厳しい生活を乗り切るために、その時々状況に応じて道具を改良し工夫していたことを伺える貴重な資料といえます。③では、すみりんの前身である財団法人住吉隣保館の創設に尽力し、初代館長となった故住田利雄さんがカメラにより記録した42,000枚以上の写真記録の一部を紹介しています。そして、④では、住吉地区に関する調査資料を収集し、それらを整理して作成した129点の資料目録を公開しています。また、④を除き、これらデータ資料には写真が添付されていないので、その中身は文字のみでなく映像でも確認することが可能です。

今後、2010年から大阪市立大学人権問題研究センターに調査委託している約3570件の住吉地区に関する資料目録と、すみりんが所蔵する約500点の映像記録データ目録の公開も予定しておりますので、ご期待ください。

公益財団法人住吉隣保事業推進協会に対する2012年度・賛助会員の入会のごお願い

公益財団法人住吉隣保事業推進協会
理事長 友永建三

平素は、なにかと当財団の取り組みに関しまして、格別のご支援ご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

さて、公益財団法人住吉隣保事業推進協会は、当財団の目的、事業に賛同する個人、及び団体に賛助会員の入会の取り組みをすすめています。

公益財団法人住吉隣保事業推進協会の動き

公益財団法人住吉隣保事業推進協会の歴史資料データベースが完成

賛助会員入会の取り組みは、今日まで当財団がすすめてきました地域社会における生活の改善及び向上を図るための各種の事業や、あらゆる差別の撤廃にむけた地域住民の人権意識を高めるための取り組みを、「公益財団法人」取得後も当財団の事業展開を効果的に実施していく上で必要不可欠な安定した経済的基盤となるためのものです。

つきましては、みなさんの積極的なご理解とご協力のもとに、是非とも、賛助会員に入会していただくことをお願い申し上げます。

(1) 個人会員 一口 3,000円(年間)

(2) 団体会員 一口 10,000円(年間)

賛助会員は、次の特典を受けることができます。

(1) 当財団が発行する「財団通信」を無料で配布を受けることができます。

(2) 当財団の出版物を割引価格で購入することができます。

(3) 当財団が主催するセミナー、講座等に割引料金で参加することができます。

※詳細に関するの問い合わせは、担当、公益財団法人住吉隣保事業推進協会事務局 前田 雅之までお願いします。

電話 06-6674-3732

FAX 06-6674-7201

「全国水平社90年の運動から学ぶ」連続講座

本年は全国水平社創立90周年という節目の年にあたります。このため、4月から12月まで、月一回「全国水平社90年の運動から学ぶ」住吉地区連続講座を開催しています。主催は、財団法人住吉隣保事業推進協会、部落解放同盟大阪府連住吉支部を中心に関係団体で構成する実行委員会です。これまで、4月22日(日)には、高山文彦さんをお招きして「全国水平社創立90周年と松本治一郎」をテーマに講演会を開催しました。5月27日(日)は、「水平社宣言について」をテーマに、部落解放・人権研究所理事の友永健三さんから、6月24日(日)には、「初期水平社の思想と運動」をテーマに、リバティおおさかの学芸員である朝治武さんから報告を頂きました。7月22日(日)には、水平社博物館の見学と柏原地区のフィールドワークを実施しました。

以上の講座やフィールドワークを踏まえ、8月以降10月まで、以下の日程で例会を企画しています。つきましては、皆様の積極的なご参加をお願いします。

テーマ：「戦後の部落解放運動
～1980年代から今日まで」

日時：9月23日(日)午後1時～3時

会場：市民交流センターすみよし北 201

講師：谷元昭信(前・部落解放同盟中央本部書記次長)

参加・資料費：500円

内容：1980年代からの部落解放運動は、部落解放基本法制定運動や国際人権運動に本格的に乗り出し、第3期の運動を創り出してきた。解放運動史上、運動的にも組織的にも最も高揚した時期であると同時にさまざまな困難に直面してきている時期でもある。全水90周年を機に、新綱領の具体的実践による真の社会連帯を実現するために、この間の部落解放運動の正負の遺産を真摯に検証し、新たな部落解放運動のあり方を共に学び合う場にする。

テーマ：「これからの部落解放運動」

日時：10月28日(日)午後1時～3時

会場：市民交流センターすみよし北 201

講師：赤井隆史(部落解放同盟大阪府連合会書記長)

参加・資料費：500円

内容：飛鳥会事件以降、部落解放運動は冬の時代に突入したといわれており、解放運動史上、もっとも厳しい時代に直面していると言っても過言ではない。こうした厳しい時代にあって、大阪府連では部落解放運動の総合的展開と銘打ち取り組みのスタートに向けた、準備が着々と進行してきている。それは、府連と支部との新たな関係の構築や社会的起業の立ち上げなどであり、従来の解放運動の枠をこえた新たな実践の試みがいよいよ本格化しつつある。こうした新たな展開を迎えた部落解放運動について、共に学びあう場とするための講座を開催する。

問い合わせ・お申し込み

「全国水平社90年の歴史から学ぶ」

住吉地区実行委員会事務局

〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東 5-3-21

大阪市立市民交流センターすみよし北

Tel: 06-6674-3731 / Fax: 06-6674-3710